

◆2021年3月第2週の説教

■日時：2021年3月14日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「あなたがたの言っているそんな人は知らない」

■聖書：マルコによる福音書 14：53－72

■讃美歌：297「栄えの主イエスの」・300「十字架のもとに」

お早うございます。

先週の3月11日、東日本大震災から10年を迎えた日、私はほとんど一日中テレビに見入る時を過ごしました。そして、何度も繰り返される津波の映像を見ながら、又、家族を失った人々の言葉に耳を傾けながら、悲しみに沈みつつも、今の私に出来ることを考えていました。

すでに、役員会便りで報告をしていますように、私は、来月から毎月第4主日は、福島の2つの伝道所で奉仕をします。甚大な事故を起こした東京電力福島第一原子力発電所に近く、

長期にわたり帰還困難区域に指定されていた浪江伝道所と、同じく小高伝道所です。前者の浪江伝道所は、震災から10年経っても未だ閉鎖されたままで、礼拝再開の目途は立っていません。後者の小高伝道所は、2年前の2019年1月から、月に1度、第4主日の午後に礼拝が再開されるようになりました。私は、牧師のいない両伝道所の代務者として赴き、浪江伝道所では礼拝再開の準備を、小高伝道所では説教奉仕を行います。

未だ帰還困難区域が広くある中で、復興の道のはるか遠いように思います。

浪江伝道所には、教会員は一人もいません。

小高伝道所は、ただ一人、礼拝の灯を守り続けている方がいらっしゃいます。

はるか遠い復興の道なのですが、浪江に礼拝の灯を新たに灯す、あるいは、小高に灯された礼拝の灯を灯し続けるその任は、誰かが負わなければなりません。

私は、その任を負いたいと思います。そのことをお話しした役員会で、ある役員が語られた通り、神様が私に命じられていると思ったからです。

代務者となる私の願いが、又そのことを受け入れて下さった役員や教会員の方々の思いが、神様の御心に適うことを祈り続けています。もし、私たちの決断が御心に適わぬことであれば、神様はいつでもその道押し止められます。

3・11は、私にとっても、立川教会にとっても、忘れることの出来ない出来事からもう一步の歩みを進め、被災地の悲しみを、福島の苦闘を、少しでも具体的に分かち合っていく出来事となればと思うのです。

それでは、今日与えられた聖書の御言葉を見てまいりましょう。

マルコによる福音書第14章53節から14章最後までです。

53：人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行った。祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まって来た。

54：ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで入って、下役たちと一緒に座って、火にあたっていた。

祭司長、長老、律法学者とは、当時の立法・行政・司法の三権を司る最高法院の構成メンバーです。つまり、ユダヤ社会の最高権力者たちが集まって来たのです。その目的は、ナザレ人イエスを死刑にするためでした。

そしてその場に、12弟子の中でただ一人、ペトロだけが忍び込んでいました。

ペトロは、イエス様を見捨てて逃げ去ることが出来なかったのです。

55, 56節.

55：祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めた

が、得られなかった。

56：多くの者がイエスに不利な偽証をしたが、その証言は食い違っていたからである。

当時の法律では、証言を成り立たせるためには2人以上の証人が必要でした。もし二人の証言が食い違えば、証言の信憑性が失われます。イエス様を死刑にしようと企んだ者たちは、イエス様にとって不利な証言を集めようとしたのですが、皆食い違い、証言を成り立たせることは出来ませんでした。

それでも祭司長たちは諦めずに証言を集めていると、新たに証言する者が現れます。

57節から59節です。

57：すると、数人の者が立ち上がって、イエスに不利な偽証をした。

58：「この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたしたちは聞きました。」

59：しかし、この場合も、彼らの証言は食い違った。

「手で造られた神殿を打ち倒し・・・手で造らない別の神殿を建て」る。

「手で造られた神殿を打ち倒」す、即ち神殿崩壊を預言することは、死罪となります。

聖なる神様の宮を破壊することですから、許されることではありませんでした。

しかし、死罪に出来るはずのこの証言も、人によって食い違い、証言を成り立たせることが出来ません。60節。

60：そこで、大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」

証言の食い違いにたまりかねた大祭司は、直接イエス様を尋問します。

「なぜ、黙っているのか、お前に不利な証言がなされているのに、なぜ弁明せず、沈黙を守っているのか」と。

61節です。

61a：しかし、イエスは黙り続け、何もお答えにならなかった。

弁明とは、その言葉が相手に対して意味を持つ時に初めてなされるものです。

イエス様を死刑にするとする結論が決まっている相手に対し、イエス様は弁明することの無意味さが分かっていました。

62b：そこで、重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と言った。

「ほむべき方」とは、神様です。大祭司は、イエス様に対し、「お前は神の御子、救い主なのか」と尋ねました。

この時、それまで沈黙していたイエス様が初めて口を開きます。

62節。

62：イエスは言われた。

「そうです。

あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、

天の雲に囲まれて来るのを見る。」

この言葉は、御自分に対する弁明などではありませんでした。

居並ぶ、この世の最高権力者たちに、自らが神様の独り子であることを証しし、さらに、来るべき時には、「神の右」に座り、彼らをも裁くことを宣言されたのです。

御自分を神の独り子、即ち神と等しい者としたこの言葉は重大でした。

律法の掟によれば、この言葉は神を冒瀆する言葉であり、石打ちの刑、即ち死罪にあたる言葉でした。

そのことを承知の上で、イエス様は大祭司の問いに答えました。それは、先のゲッセマネの園での、三度（みたび）に及んだ祈りにおいて、変わることなく示された神様の意思に従う者としての言葉でした。

63 節から 65 節。

6 3 : 大祭司は、衣を引き裂きながら言った。「これでもまだ証人が必要だろうか。

6 4 : 諸君は冒涇の言葉を聞いた。どう考えるか。」一同は、死刑にすべきだと決議した。

6 5 : それから、ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、「言い当ててみろ」と言い始めた。また、下役たちは、イエスを平手で打った。

衣を引き裂くのは、裁判の終わりを告げる行為であり、又、大祭司の激情を表す行為でもありました。死刑に処する決議を受け、イエス様は、侮辱と暴力に晒されます。

この裁判の場面を記しながら、マルコはペトロに目を向けます。

66 節から 68 節を読みます。

6 6 : ペトロが下の中庭にいたとき、大祭司に仕える女中の一人が来て、

6 7 : ペトロが火にあたっているのを目にすると、じっと見つめて言った。「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた。」

6 8 : しかし、ペトロは打ち消して、「あなたが何のことを言っているのか、わたしには分からないし、見当もつかない」と言った。そして、出口の方へ出て行くと、鶏が鳴いた。

他の弟子のように、イエス様を見捨てることが出来ず、恐る恐るイエス様の後について行き、事の成り行きを見届けようとしていたペトロでした。そのペトロが火にあたっているのを1人の女が見つけ、彼を見つめて言います。「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にだった」と。

この言葉を言われたペトロは、どんなに恐ろしかったかと思います。

自分の周りにはいる者は、皆イエス様を殺そうとして集まっている者たちです。

誰一人として味方がいない中で、イエス様と自分が一緒にいることが分かってしまったら、自分はどうなるか分かりません。

ペトロは女の言葉を打ち消し、「あなたが何のことを言っているのか、わたしには分からないし、見当もつかない」と言い、自分の身の安全を守ろうとしました。そして、その場にいることは危険だと思ったのでしょうか、火の明るさから逃れ、暗い出口の方へ出て行きました。その時、鶏が鳴いたのです。

ところが、同じ女が、ペトロのことについて又言い始めます。

69、70 節。

69：女中はペトロを見て、周りの人々に、「この人は、あの人たちの仲間です」とまた言い出した。

70：ペトロは、再び打ち消した。しばらくして、今度は、居合わせた人々がペトロに言った。「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから。」

女に続き、今度は、そこに居合わせた人々までもペトロに迫ります。お前もあのナザレのイエスの仲間だと。

この時、ペトロには、最早彼らが指摘する言葉から逃れる道はありませんでした。そして、最後の手段として、71 節の言葉を語るのです。

71：すると、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と誓い始めた。

呪いの言葉、そして誓い。

その意味するところは、もし私の言葉が偽りであるなら、自分は神様から呪われても良いとすることです。

そして、誓うのです。「あなたがたの言っているそんな人は知らない」。

今日のメッセージを準備しながら、71 節のこの箇所に来て、しばらく呆然としていました。様々な問いが浮かんだ